

《無原罪の御宿り》にみる父権的支配者としてのマリア

山尾 彩香

はじめに

カトリック教会における聖母マリアを巡る題材のひとつに「無原罪の御宿り」というものがある。聖母マリアを巡る教義の中でも、これは中世からの長きに渡る論争のうえ19世紀半ばにしてようやく一応の決着を見るものだった。楽園のアダムとイヴが犯した罪により原罪を背負った人類の中で、キリストの母であるマリアは処女にして、その原罪を免れている特別な存在として確立される。19世紀になって正式に教義として容認された「無原罪の御宿り」ではあるが、この図像化は16世紀になってからなされ、その教義の性格ゆえ《無原罪の御宿り》は宗教画家たちのさまざまな努力と創意工夫を要す表象となっていく。そこに反映されるのはこの特権的な処女を巡る諸相との関係性でもあった。それは教会の男たち、イヴ、プロテスタント、そして蛇としての女の性そのものや、異教の女神たちといったように、マリアをマリアたらしめるための登場人物たちだ。マリアが《無原罪の御宿り》で担われた役とはなんであったのか。そしてマリアはなぜ蛇をふみつけるのか。本稿では、「無原罪の御宿り」のマリアの経緯と、父権的支配者として表象されるに至った《無原罪の御宿り》のマリアの本質を考察してみたい。

1. 「無原罪の御宿り」と特権的処女としてのマリア

教義の問題提起

「無原罪の御宿り」の教義の始まりは初期の教会教父である神学者アウグスティヌス(354-430年)の頃からすでにみられた。彼はアダムとイヴに起源をもつ

原罪が、性行為によってすべての人間に生まれながらに罪を享けていると強調する一方で、聖母マリアだけは例外である可能性を提示する。

そこで聖処女マリアは例外としよう。罪が論じられているとき、わたしは主の栄誉のゆえに彼女について総じてどんな問いも立てたくない。じっさいわたしたちはいったいどこから、いかに多くの恩恵が罪をあらゆる側面から克服しうるために、彼女に授けられたかを知るであろうか。彼女は、罪をもたなかったことが知られているかたを受胎し、生むに値したのであるから¹。

初期の教会教父たちは、マリアが生まれながらにして罪を免れていたかどうかには言及しなかったものの、彼女が罪に対して特別な処女であるとみなしていた。431年のエフィソス公会議にて聖母崇拜が正統教義と決定された以後も、マリアの特権的な処女性はカトリック神学の中心的課題として度重なり協議され、聖母マリアは唯一の汚れなき人間としてその身体的特権を獲得していった。聖母は男の精液に汚されておらず、彼女の妊娠は聖霊によって成され、その子どもは神の子であるため、彼女は出産後も処女でありえた。中世において聖書と並び最も広く読まれた書物として、その後のヨーロッパの芸術や文学に大きな影響を与えた13世紀のドメニコ会士、ジェノヴァの大司教であったヤコブス・デ・ヴォラギネ(1230頃-1298年)の『黄金物語』では聖母の処女性と聖性にまつわる説話を数多く載せている。女は三つの呪いを受けており、それは「第一に子供を

生まぬときの恥辱」第二に子供を生むときの罪の呪い」第三に出産のときの責苦の呪い」²であるが、マリアだけがただひとり女のなかで祝福され、その呪いをすべて免れているという。聖バルナルトゥス³によせて繰り返しヤコブスは「マリアは、完全無欠なおとめであり、罪なくしてみごもられ、妊婦の苦しみを知らず、苦痛なしに出産」⁴したことを強調する。また聖母は産褥のお潔め⁵を必要としなかった。なぜなら彼女は「人間の種子によって受胎されたのではなく、また、すでにおん母の胎内にいたときから完全に潔められ、聖化されておられたからである。母の胎内において聖霊によってくまなく聖化され潔められておられたので、マリアのなかには、罪へのいかなる意志も見いだせなかった」⁶からだ。聖母は月経もなく、神が人間の女に与えた最大の罰である出産の苦しみもなく無血でイエスを出産した。彼女はイヴの血の穢れの悉くから免れた奇跡の身体を持つのだ。しかし、教会が聖母マリアが汚れのない存在であることを真実として受け入れるためには、彼女の処女性を語るうえで孕む多くの問題を解決せねばならない。聖母は如何にしてイヴの原罪を免れたのか。「無原罪の御宿り」はその中の問題の一つとして「聖母マリアはいつから罪を免れているのか」という問いに対する解決を目指すものであった。

「無原罪の御宿り」をめぐる議論

聖母が無原罪のうちに受胎したという記述は聖書の原典にはない。彼女の誕生については二世紀の偽書『ヤコブ原福音書』⁷において以下のように語られている。子室に恵まれなかったヨアキムは荒野に赴き四十日四十夜断食を行い、他方妻のアンナは夫と子の不在を嘆いていた。すると主の御使いがヨアキムとアンナのもとへそれぞれやって来て、主が願いを聴き入れアンナが孕んで子供を生むだろうことを告げた。帰ってきたヨアキムにアンナが走り寄り彼の首にぶら下がると「主なる神が私をとて祝福して下さったことが今わかりました。みて下さい。寡婦はもう寡婦ではなく、子のいない女が孕むのです」〔4・4〕⁸と語り、こうしてマリアはこの夫婦の子と

して誕生した。ここで語られるのは、マリアの無原罪受胎ではなく、旧約聖書でしばしばみられる子に恵まれない敬虔なる夫婦(アブラハムの妻サラ、イサクの妻リベカ、サムエルの母ハンナなど)に起こった神の奇跡であった。マリアのこの奇跡の受胎を祝う祭日はすでに7世紀にはあったとされ、クレタのアンドレアやエウペアのヨハネスらがこの祝日についての証言を残している⁹。12世紀になるとこの祝日が信者の中で盛んに祝われることを受け、ベネディクト会修道士カンタベリーのエアドルメス(1060頃-1128年以降)が「無原罪の御宿り」に関して最初に提示した神学的著作『聖母マリアの御やどりについて』を記した。彼はその著の中で、聖書や正典に記されていないこのマリアの御宿りの祝日を祝う純朴な信者を擁護する形でその正当性に言及する¹⁰。

さて、主の母ご自身を通して全被造物に現れた偉大な善の完成は、その発端を敬虔な心で考察するよう人間の精神に勧めていると思われる。実際、旧約のもろもろの出来事は、彼女が到来し、やがて主の母となることを告げている。けれども、誕生の間近になんらかの託宣や天使の告知があったか否かは、たとえば彼女の御子である主キリストや御子の先駆者、洗礼者ヨハネについて、いずれも大部分が聖なる物語によって十全に語られているのに対し、聖なる書物にもなく、正典にも見い出されない。(…)けれども、御やどりの発端がかくも崇高、神聖で、言い表しえないため、人間の精神がそれを洞察し尽くすことはできないと教会の純朴な子らが判断しているとしても、真実から逸れ信仰に反することではないと思う¹¹。

エアドルメスは、イエスが人間には捉えることのできない神の本質を「僕の形をとって自らを空しくし、その到来を人間の精神が捉え、理解できるように適応させた」のとは反対に、マリアの御宿りの発端がその神性ゆえに表現されず「人間の精神に十分に理解できない」のは、それほどに「大いなる神性の

崇高さに覆われている」からであると論じた¹²。また、マリアが汚れなき処女であることは「神は万物に優れて貞潔で、清いだけでなく、貞潔そのもの、清さそのものであるから、この清さそのものである神を真の人としてその肉体から生むことになる」ためであり、ゆえにマリアは「まさしく何よりも清くなければならなかった」のだ¹³。

一方で「無原罪の御宿り」の可能性を否定する神学者たちもいた。シトー派修道士のクレルヴォーのベルナルドゥス(1090-1153年)は、マリアの両親が性欲なくして子を孕んだとは考え難くそこには必ず原罪が絡んでいると論じ、1140年のリヨン公会議で無原罪の御宿りを祝うマリアの祝日の制定に反対した。13世紀のスコラ哲学の大成者であるトマス・アクィナス(1225-1274年)やボナヴェントゥラ(1221-1274年)らも「無原罪の御宿り」に批判的であった。彼らによれば、無原罪はイエスにだけ妥当するものであり、マリアには妥当しない。伝統として原罪は親の性行為により子どもに感染するという考え方があり、その起源には『創世記』のアダムとイヴがある。トマスは原罪の汚れについて能動的な性行為によって生み出された子どもはアダムの子孫として原罪の汚れを被り、他方「もし或る者が人間的肉身から神的なちからによって形成されるのであれば」その外的な動因はアダムに起源をもたず、その者は「人間的罪には属しない」ため原罪の汚れを被ることはないという¹⁴。どのような夫婦の行為も—そこにはヨアキムとアンナも含まれる—母胎の墮落と汚点を意味するため、マリアもまた原罪を被っていることになる。しかしキリストにおいては、「神の母が最大の潔さ puritas をもって輝く、ということが起きねばならなかった」¹⁵ため、キリストの受胎のさいに夫婦の交わりは行われず、神による外的要因によってキリストだけが純潔に、両親の生殖行為の際の原罪の感染の危険を身に招くことなく、性的な感染なしに受胎されたのだという。また、もしもマリアがアダムとイヴの原罪を免れているとするならば、それはイエスによる贖罪を彼女は必要としないこととなり、全人類の贖い主であるイエスの存在意義を損なうこととなって

しまう。それはあってはならないことである。ただ、彼らはマリアがアンナの胎内にあったときに、一般の人間がキリストによって贖われる罪を神の恩寵によってすでに聖別され免れていると信じていた¹⁶。これに対して「無原罪の御宿り」を擁護するフランチェスコ会修道士の中でも「マリア博士」の異名を持つドゥンス・スコトゥス(1266頃-1308年)は、トマスらの主張を逆手に取り、マリアがイエスの救済を必要としないことでイエスの卓越性と威厳を傷つけかねないという考え自体がイエスに対する信仰を損ねるものであると反論した。そして、イエスは完璧なる贖い主であるからこそ、その恩寵でもってマリアをあらかじめ神と仲介させ罪を回避させた論じた。そしてフランシスコ会士らは、父なる神は人類の救済のプランのなかにあらかじめマリアを組み込み、マリアは世界の創造前にすでに存在を予定されていたという理論を組み立てていった。こういった論争の中で、教義の正当性を認める様々な教皇勅令が發布されていった。バーゼル公会議(1431-1439年)ではローマ教会に公式に認許されなかったが、マリアは「神聖にして無原罪」であるという明確な宣言が史上初めてなされ、教皇シクトゥス4世(1414-1484年)は無原罪の教義をはじめて認めた教皇となった。そうして「無原罪の御宿り」は1854年になりついに教皇ピウス9世(1792-1878年)の大勅書によって正式にカトリック教会の教義として制定されるに至った。教義の制定にはスコトゥスらの論証が原理となって、人類の救い主であるイエスの普遍的救済と神の特別な恩恵と特典による先取的な救済¹⁷により、処女マリアがその懐胎の最初の瞬間において、原罪のすべての汚れから前もって保護されていたとする「無原罪の御宿り」の定義が確立されたのだ¹⁸。

特権的処女性

中世後期に広まった「無原罪の御宿り」の思想は唯名論といわれる学派の神学思想と深く関係していた。唯名論の神学者らは、神の恩寵は悔改めにより取り戻される善き魂に対してのみ与えられるわけであるが、悔い改めたいと願う意思是神によってはじ

めから人間の中に与えられているとし、すなわち人間の性は本来は善であるという考え方に立脚していた。この唯名論のキリスト教的性善説ともいべき思想にとってマリアの「無原罪の御宿り」という教義は、彼らの主張を裏付ける格好の範例と見做された。罪の汚れのないマリアという存在は、罪に染まらない善なる魂の状態が存在するという証明となる。マリアは、神に造られたときのままの善性を喪失することなく、被造物が完成へと向かい得る力の源である純粋な本性を保持する女性なのだ。「無原罪の御宿り」がマリア論との関係で持つ重要な神学的意義がここにある。罪を犯す以前の人間の善なる姿をあらわすマリアは、終末において罪が清められ、本来のあるべき姿に戻る人間のひな型となり、人々はマリアに神とキリストによってもたらされる栄光の輝きを見出すのだ。「それを神学的に表現すれば、マリアとは、教会、新しいイスラエル、そして人間全体の希望が人格化されたものであるということになる」¹⁹。

この十数世紀におよぶ「無原罪の御宿り」への教会の強い関心は、聖母マリアの特異性すなわち特権的処女性の証明をも成しえた。「無原罪の御宿り」による聖母マリアの処女性は神によって保証されたとされる、聖書にはないこの教義の制定が意味するものはすなわち、人間の教会によるマリアの理想的女性像形成の成果といえるのではないだろうか。聖母マリアの処女性は、教会という男によって罪なる女の性とは聖別された特別な女性であることを表明する。中世に女性の権威が貶められていくのと反比例するように、聖母信仰は隆盛を極めていく。

中世の神学ではマリアを、救われた人間の代表、罪の汚れを帯びていない者、教会の心、新しいイスラエル、天の女王、復活の初穂など呼んだ。十二世紀から十五世紀までの間、彼女の名は中世の神学の中で星の如く輝き、彼女の名は、現実の女性たちが卑しめられ、軽んぜられるのとは反対にますます光り輝くものとなっていた²⁰。

悪い女と善い女という二元論的図式は、その明確さから人びとに積極的に受容されたことであろう。イヴはすべての呪われた女性の代表として、そして聖母マリアは勝利の象徴として表象界に顕現する。美術の主題となった「無原罪の御宿り」のマリアは勝利の支配者として君臨することとなる。

2. 《無原罪の御宿り》とカトリック教会

教義の図像化

中世の長きに渡って論争が繰り返されてきた「無原罪の御宿り」ではあるが、キリスト教美術の主題として広汎に図像化されるには16世紀まで待たなくてはならなかった。それはこの抽象的な教理をいかにして図像化するかという困難によるものであった。「『無原罪』という言葉が示しているように、『無』、つまり不在や否定を表現することが求められているのである。これは(…)絵画や彫刻にとっては至難の業である。なぜなら、何らかの素材に働きかけることで、何ものかを目の前に存在させるというのが絵画であるのに、逆に何かが『ない』ということを示さなければならないからである」²¹。16世紀の教会画家たちの苦心の結果、いくつかの主題様式が固められていった。

例えば、この教義が当時も論争を繰り返していたことから、画面にはしばしばこの主題にまつわる論争を示すための教会博士が配された。フィレンツェの画家ピエロ・ディ・コジモ(1462頃-1521年)がフランシスコ会の修道院教会堂のために描いた《無原罪の御宿り》(1510年頃)【図1】では、ほぼ正方形の画面下部でこの教会博士たち【図2】が銘文の刻まれた巻物や板を手に論争している様子、あるいはこちらにその言を示すように視線を送る様子が描かれている。

彼らは左からアウグスティヌス、ベルナルドゥス、フランチェスコ、ヒエロニムス、トマス・アクィナス、アンセルムスが並び、それぞれが手にする銘文にはラテン語で「汝をあらゆる罪から守られたお方を讃えよ」、「処女の肉は、アダムに由来する汚れを



図1 ピエロ・ディ・コジモ《無原罪の御宿り》1510年頃、184×178 cm、フィエーゾレ、サン・フランチェスコ聖堂



図2 「無原罪の御宿り」について議論する教会博士たち(図1下部)



図3 神を中央に据えた左右対照的な構図(図1上部)

まったく受け入れない」、「処女マリアの受胎をお祝いしよう」、「マリアにおいてなされたことは何であれ、すべてが純潔にして真実で、恩寵によるものであった」、「マリアは、あらゆる原罪と現実の罪から免除されていた」、「その受胎の祝日をお祝いすることを拒むような、処女の崇拜者が本当にいるとは思われない」²²と記され、誰もが「無原罪の御宿り」に好意的な姿勢を示している。地上で議論する教会博士たちの頭上には天上が広がり、画面の上半分【図3】を占めている。

画面中央には父なる神が「この法は、汝のためではなく、万人のために定められたのだから」と記された板を左手にもち、右手には権杖を掲げ、その眼差しと身体と右足を右隣の女性に向けている。この女性こそマリアであり、彼女は両手を合わせ神の膝元に跪き敬虔に顔を俯かせる。彼らの周りには雲の中から5人の天使が姿を現し、彼らもまたマリアを讃える文言を記した巻物を地上の教会博士たち、あるいはこの絵画を観る者たちに掲げ示す。画面左の天使は旧約聖書の『雅歌』の花嫁を伝統的にマリアに見立て「高貴な人の娘よ、あなたの足はなんと美しいことか」²³と称賛の言葉を指し示す。また画面右では「ああ、祝福された処女よ、あなたは純潔によって天使たちをも打ち負かす」巻物を天使が3人がかりで掲げている。その一番前の天使は、神をはさんでマリアと対照的に描かれている。神はマリアに身体を向けており、マリアと同じように跪く天使には濃い影が落ちている。まるで掲げる巻物の文言を体現しているような姿だ。天使の左手の人差し指は画面下部つまり地上を指し、教会博士たちに観者の視線を誘う。そして自身の身体は観者に向け、「無原罪の御宿り」の教義と正当性をより効果的に宣伝しているようだ。この天使に限らず、左右対称的に描かれた均整の取れた構図の中で、描かれた人物たちは視線や指で巧みに画面の上下を誘導し、最終的にはマリアに収束し主役の所在を明かしている。

無原罪のマリアと原罪のイヴ

同じくフィレンツェの画家であったルカ・シニョレッリは《無原罪の御宿り》(1521-1523年)【図4】で、画面上部には神とマリアを中央に上下垂直に配し、画面下部には議論する教会博士の代わりに旧約聖書の預言者たちを描いている。

神とマリアの両隣には、マリアの純潔を象徴するように有翼の天使が薔薇と百合の花を散らし、頭部だけの智天使(ケルビム)が左右に6体ずつ縦に並びふたりを取り囲んでいる。画面下部では立像のマリアの腰から下の両隣に3人ずつ旧約聖書の登場人物たちが、やはり文言の刻まれたものを手に議論する様子を見せたり、頭上の神とマリアを仰ぎ見たりしている。左端に立つダビデとその横で跪く老人はエッサイ、右端のソロモンの横の長髯の老人はイザヤであろうか。そしてシンメトリーな構図の中、より装飾的な世界が広がるこの絵画で最も注目したい点が、画面中央下部【図5】、マリアの足の下に描きこまれた旧約聖書の場面である。

マリアの赤い衣から覗く両足が踏みしめるのは4体の智天使たち、そしてその下に葉を生い茂らせた樹木である。木の茂みから裸の上半身を覗かせるのはおそらく下半身が蛇となっているであろう人物、そしてその右手から何かを受け取る裸の女性。女性は腰に右手をあて、視線は半身半蛇の人物へ、そしてその裸体を観者へと向け、あるいは目の前の男へと晒すように堂々と立っている。そのやり取りを見ているのは、こちらに裸の背を向けた男だ。彼もまた右手を腰にあて仁王立ちしている。そこには『創世記』の原罪の場面が描かれているのだ。楽園の木に絡まる悪魔がイヴに手ずから禁断の実を渡し、アダムの誘惑に負ける暗示であろうか、彼もまた左手を何かをつかむ形であげている。「人類がこの状態にあるのは誰のせい、卑賤と滅亡の無力に陥ったのは誰のせい、(…)お前たち、アダムとイヴよ、その責めはまさしくお前たちにある」²⁴もしエッサイの根から高貴な仕方で生じた最も栄光に満ちた若枝にあの美しい花が咲き初めなければ、これほどの悪から逃れ出る希望は皆無だっただろう。し



図4 ルカ・シニョレリ「無原罪の御宿り」1523年、
217×210 cm、コルトーナ、ディオチェザーノ美術館

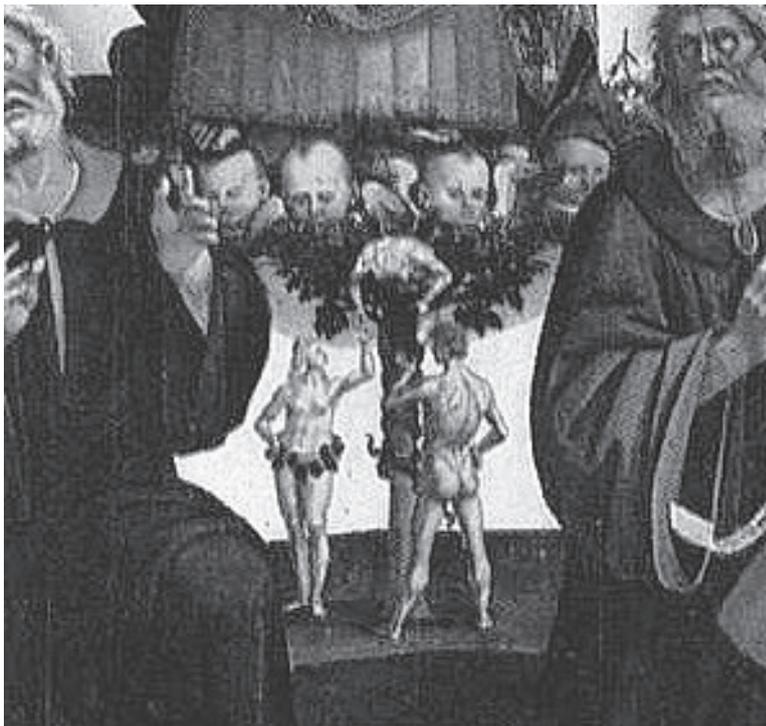


図5 『創世記』原罪の場面(図4部分)

かし、御子は望んだ計画に違わずこの世に生まれ、その溢れる恵みによって彼の上に憩う聖霊の賜物を彼に聴き従う者たちに分け与え、そして善に対する無知、アダムを通して侵入し、広がっている悪から力強くこの世を引き離し、さらに天国に赴くように、すでにある者たちを実際に、またある者たちを希望において哀れみ深く呼び戻したのである」²⁵。原罪を免れたマリアの教義を示すには格好の題材といえるだろう。また、マリアはエッサイの枝に例えられる。「エッサイの株からひとつの芽が萌えいでその根からひとつの若枝が育ち／その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」〔イザヤ書11:1-2〕²⁶花を咲かせる若枝はマリアを指し、花は祝福されたイエスを指し示す。エッサイの木はキリストの系図として表されるものであるが、この楽園の木はエッサイの木をも象徴しているのかもしれない。木の左右に配された旧約聖書の人物がこの系図に連なる者であることからその説得力は増すだろう。

イヴとアダムの原罪、そしてエッサイの木、そして「無原罪の御宿り」の教義をより巧みに寓意的に描いた作品がある。ジョルジョ・ヴァザーリ(1511-1574年)の《無原罪の御宿り》(1540-1541年)【図6】だ。ヴァザーリはこの作品について、彼自身が記した『芸術家列伝』で次のように熱弁した。

フィレンツェのサンティ・アポストロリ聖堂の祭壇画として大銀行家のビンド・アルトヴィーティによって依頼された仕事は困難を極めるもの



図6 ジョルジョ・ヴァザーリ《無原罪の御宿り》1541年、58×39 cm、フィレンツェ、ウフィツィ美術館

であったが、ヴァザーリは苦心の末に完成することができた。それは画面の中央に原罪の木を立て、その根元には神の命令を最初に破ったアダムとイヴが裸でつながれているもので、さらに別の枝にはアブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、アロン、ヨシュア、ダビデ、そのほか旧約聖書の王たちが古い順に次々とその両手を縛られている。しかしサムエルと洗礼者ヨハネの二人は母の胎内で聖別されていたために、例外的に片方の腕だけを縛られている。その木の幹には、上半身が人間の姿をした旧約聖書の蛇が尾をまきつけ、その両手を後ろで縛られている。そしてその角を踏みつけるのは、彼の頭上に輝く栄光の処女マリアの片足だ。マリアは太陽を身に纏い、十二の星の冠を戴き、もう片方の足は月の上に乗っている。彼女は多くの裸の小天使たちの輝きの中で宙吊りになり、天使たちはマリアの発する光線に照らされる。このマリアの光線はさらに、木の葉のあいだを通して、木につながれた者たちをもまた同じように照らし出す。こうして彼らは、マリアからも

たらされる美德と恩寵によって、その鎖から解かれようとしている。画面の上の天空には二人の天使がいて、巻物を手にしている。そこには「イヴの罪によって断罪された人々を、マリアの恩寵が救った」と記されている。

マニエリスムの時代の趣向が現れているこの作品で描かれた《無原罪の御宿り》では、図像の定石が確立してない時代に、それまでの画家たちの創意工夫の結晶ともいえる集合体をなしている。地上で死んだように弛緩した裸体のイヴーしかし、その肌は彼女の左腕を捕らえる木の肌のようにどこか緊張感を孕んでいる一の陰部から蛇の尾が伸びているようにみえる。それは罪がどこからもたらされているのかを、そしてその毒を含んだ蛇が絡みつく木の枝を通して、罪が男たちへどのように感染していったかを暗示しているようだ。だが蛇の身体を伝って頭上へと視線を移せば、その汚れが栄光の聖母に感染していないことが理解できる。悪魔はいまや拘束され、己の頭と角を踏みつける処女を為すすべもなく見上げることしかできないのだ。

マリアには「イヴの罪」から人間を解き放つように予め定められている者、「第二のイヴ」としての役割が教会から与えられている。エデンの園で神は蛇に向かって「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意をおく。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く」〔創世記3.15〕と言い、中世の神学者はこれを蛇(サタン)を打ち負かす「第二のイヴ」の到来の予型とした。蛇を踏みつけるマリアはこれを暗示する。そして、彼女は太陽を身に纏い、十二の星の冠を戴き、月を足の下に踏む。「また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には星の冠をかぶっていた。」〔ヨハネの黙示録12. 1〕によるもので、「女」とは「教会」の象徴にして聖母マリアであるとの伝統から、黙示録の挿絵写本などの図像【図7】でよく描かれているものだ。

また、全体の構図を観たとき、マリアの身体には枝も蛇も絡みついてはいないが、彼女にもまた樹木の一部のような連続性が感じられる。木は変容の象



図7 「黙示録の女(太陽を身にまとう女)」ヴァランシエンヌ写本、9世紀、ヴァランシエンヌ市立図書館、Ms.99



図8 ヘルトヘン・トット・シント・ヤンス《エッセイの木》1480年頃、89×59 cm、アムステルダム、国立美術館

徴ともなる²⁷。伝統的なエッセイの木の図像【図8】では、地面に横たわり系樹の根となるのはエッセイである。しかしヴァザーリの《無原罪の御宿り》では、アダムそしてイヴがエッセイの代わりに株となり、その枝に子孫たちを括り付けている。だがマリアだけは変容することなく、輝ける若枝として天上で輝き続け、特別な母親、処女として聖別されるのだ。

対抗宗教改革と図像の確立

「無原罪の御宿り」が16世紀に美術の主題として広まり、その特性から画家たちによる多種多様の創意工夫—それは詞書やシンボル、アレゴリーなどで多弁で理屈っぽいものが少なくなかった—がなされてきたが、17世紀のとりわけスペインの美術において、対抗宗教改革が聖母崇拜に与えた刺激により、新しい図像表現が定着するようになった。16世紀に宗教改革がおきると、プロテスタンティズムの中でマリア崇敬の度合いは低下していった。その理由のひとつにプロテスタントの聖書重視主義がある。聖書に

ないマリアに関する物語の真偽は定かではないとするもので、マリアの昇天や無原罪の御宿りはプロテスタントにとっては真の教えとは言えない。また、カトリックにおける「無原罪の御宿り」のマリアは、神の持つ聖性を身に帯びる力を人間に与える「純粋な本性」であると表現されるが、プロテスタントの神学からしてみれば、教会であれ、教会のシンボルであれ、神が人間を救おうとする行為のあいだに、マリアは仲介者として割り込むことはできない。そこにあるのは父なる神と、神の代理人としての神であり人でもあるキリストのみなのだ²⁸。対抗宗教改革期の中で、当時のカトリック教国であったスペインでは「無原罪の御宿り」の教えが熱心な支持を集めており、教皇庁は、ドミニコ会を中心とする反対意見もあり教義として容認しないまでも、15世紀末以降には全教会にその祝日(12月8日)を祝うように義務付けていた。教義化を目指す運動が聖母崇敬の強いセビーリャの聖職者を中心として17世紀の前半には展開されていた。こうした動きの一環として、この

時期「無原罪の御宿り」を主題とした美術が盛んに作られたとも考えられている²⁹。

著述家であり異端審問所付美術監督官でもあった画家フランシスコ・パチェコ(1564-1654年)はその著作『絵画術』(1649年)で《無原罪の御宿り》のそれまでの様々な図像を整理、統合し、規範となる形式を定めたものを記している。いわく、中世以来マリアと同一視されてきた『ヨハネの黙示録』12章に登場する「太陽をまとい月を踏む女」の姿でマリアを描くべきとした。また、マリアは12、3歳の花盛りのもっとも美しい少女の姿で、その両目は純粋にして誠実、鼻と口は完璧このうえなく、頬はバラ色、黄金の髪は優雅にほどけている。彼女は白い着物の上に青いマントを着け、手を胸にあて、あるいは合掌して祈っている。そして足元の月は純潔を表す三日月で、それは下弦でなければならない。なぜなら月は太陽に照らされている部分が明るく見えるのであるから、マリアが太陽を身に纏っているからには足元の月は下弦でなければならないのだ。そして蛇は描きこまないほうが望ましい。

ディエゴ・ベラスケス(1599-1660年)の処女作品のひとつに《無原罪の御宿り》(1618頃)【図9】がある。この作品が描かれたのはパチェコの『絵画術』が出版される前ではあるが、彼の「無原罪の御宿り」の図像に関する理解はパチェコの影響を受けているといっても過言ではないだろう。ベラスケスはパチェコの弟子であり、パチェコの娘であるフアナと結婚した彼の義理の息子でもあるのだ。ベラスケスが《無原罪の御宿り》を描いたとされる年は、彼がパチェコから独立した翌年のことである。ベラスケスの《無原罪の御宿り》の「絵の中で聖母は落ち着いた、崇高な姿をし、紅の陰影のついた白いガウンと青のマントをまとい、太陽を背に月の上に立っている。その顔は金褐色の頭髮に縁どられ、両手は、なめらかな画法によってひびもなく、清い、いわば愛らしい形をしている」³⁰。「満月のように美しく、太陽のように輝く」[雅歌6.10]くマリアの足元の月は画面底辺部で透け入り、そこには濃淡の境の中に聖女の連禱—それは「閉ざされた庭」「園の泉」や「命の水の井」³¹、エッサイの木だろうか—が表象されている。ベラス



図9 ディエゴ・ベラスケス《無原罪の御宿り》1618頃、134.6×101.6cm、ロンドン、国立絵画館



図10 ピーテル・パウル・ルーベンス《無原罪の御宿り》1628年頃、198×137 cm、マドリッド、プラド美術館

ケスはマリアの足元にパチェコが避けるように言った蛇を描きこまなかった。しかし、マリアの足元で踏みつけられる蛇の図像はこの美術の主題の中で消え去ることはなかった。

例えばピーテル・パウル・ルーベンス(1577-1640年)は1628年から29年まで外交官としてマドリードに滞在し、ベラスケスとも親交を持っていたが、彼の《無原罪の御宿り》(1628年頃)【図10】には球体状の上弦の月の上で、蛇を踏みつけるマリアが描かれている。蛇が口に咥えているのはイヴとアダムが齧った楽園の果実であろう。そしてマリアに踏みしだかれる蛇の質感や動作からは、この生き物がいまいかに悶え苦しんでいるかがまざまざと伝わってくるようだ。

カトリックのバロック画家たちが蛇を描きこむことを好んだのは、この蛇がプロテスタントの異端らを象徴するものであり、蛇を踏みつけ原罪を打ち負かすマリアは、異端を打ち負かす教会の勝利の象徴として考えられていたためであった。また「太陽をまとい月を踏む女」の典拠となった9世紀頃から隆盛した『黙示録』に関する図像は、人びとに信仰による救済と教会とその教えの服従の必要性を強く説き、教会の宗教的権威を高め、レコンキスタの運動と結びつき、異教徒に対する教会の勝利の意味合いを伝統的に象徴していた。プロテスタントにより厳しくマリアの聖性を批判されたカトリックは、マリアの「無原罪の御宿り」をはじめとする新たな図像によって自らの教義を盛んに造形化した。結果としてそれらの図像は海外へのカトリックの布教の際に大きく貢献することとなる³²。こうしてバロックの「無原罪の御宿り」のマリアはカトリック信仰のプロバガンダとして最前線に立ち勝利を収めていく。マリアの光は教会の勝利と権威のために輝き、いまやマリアそのひとが唯一無二の特別な存在として、敵を足に踏みしく支配者として君臨するようになったのだ。

3. 父権的支配者としての傀儡のマリア

蛇をふみつける

聖母マリアは人類で唯一原罪を免れた汚れなき処女であり、神の母であり、恩寵の仲介者であり、勝利者である。そしてそれを確立させたのはカトリック教会だ。マリアは女でありながらもその特権的な処女性ゆえに女の性を超越したものとなる。マリアの「その純潔は、ほかの人びとのうえにもあふれでた。というのは、マリアは、いっしょにいたすべての男たちからすべての肉の衝動や欲望を消してしまわれたからである。だから、ユダヤ教徒たちも、マリアはなみはずれて美しかったけれども、彼女を見て欲望をおこす男はひとりもいなかった(…)。マリアの純潔さがもつ力は、彼女を見るすべての人びとに浸透し、彼らの肉の欲望をことごとく圧倒した。だから、マリアは、その匂いを嗅ぐとどんな蛇も死んでしまうというヒマラヤ杉に似ている。つまり、彼女の聖性によって、人間の肉のなかに住む蛇が殺されたのである」³³。唯一彼女だけが聖人聖女のなかでその至聖の純潔により、周りの人間のあらゆる肉の欲望を駆除することができた。

蛇という生き物のもっぱらキリスト教の中では邪悪の象徴として捉えられている。その典拠は聖書の『創世記』にあることは周知の通りであろう。人間に死と苦難をもたらした原因の一端はこの忌まわしき蛇なのだ。蛇は悪魔やサタンと同義語とされ、『ヨハネの黙示録』ではサタンを称して「年を経た蛇」と呼ばれている。正確には年を経た蛇は竜として黙示録で登場している【図7】。この竜は先に記した黙示録の「太陽をみにまとう女」の前に立ちはだかり、その女が産むであろう男児を食べてしまおうと待ち構える。しかし、女と子どもは神によって難を逃れ、竜は天の使いたちによって地上へと投げ落とされる。蛇は悪の化身としてだけではなく、教会が忌み嫌う性欲の象徴でもあった。性欲が人間に罪を感染させ殺すのだ。だからこそマリアはこの邪悪な生き物を踏みつける。その役割を担うことができるのは、彼女が原罪を免れた選ばれし聖処女であるからに他

ならない。しかし、聖別されたこの聖母が踏みつけるのは蛇の悪しき側面だけではない。

蛇は古来より、人間を助ける賢者としての顔ももつ。蛇はその脱皮などの特性から不死、生命、知恵のシンボルと称され、癒しや豊穡をもたらし、時として世界創造といった根源的な力まで有する。そしてこの生き物は月とも深い関係をもつ。脱皮を繰り返す様から永遠の命をもつと考えられた蛇と、満ちては欠ける月は、更生と死の力を連想させる。強力な力をもつ蛇は太古から女神の良き友でもあった。

例えば原初に関わり、豊饒をもたらし、天と地を自由に巡り、冥界で死者に命を与え、不死の食物や水を提供する生命の樹を司り、力の言葉を持ち、全人類の表象としての王である息子を産み、彼を守護し、玉座の上で膝に乗せる母親であるエジプトの最高の女神イシス【図11】は蛇を頂き、自身が蛇として描かれることもあった。ギリシア神話の女神アテネの聖獣は蛇であり、彼女の身体の上でその威光を知らしめるか、守護者のように傍らに仕えていた。彼

女の古い表象には、今日親しまれている兜の戦女神ではなく蛇を纏ったものがある。また戦士としての女神として表象されるときも、彼女は蛇と共にあった【図12】。アテネは英雄ペルセウスのメドゥーサ退治を助け、蛇髪が生えたその怪物の頭を貫き受ける。この怪物の首は、彼女が伝統的に纏う山羊皮のマントもしくは楯に飾られ、勲章のように見る者を威圧する。彼女は知恵の女神でもあった。彼女の名を冠する都市国家アテネの伝説上の王たちはしばしば半身半蛇の姿で生まれたし、都市に暮らす人びとは、蛇を彼女の聖域で大切に飼い、都市国家の命運を占わせていた³⁴。彼女の怒りに触れたラオコーンは彼女の蛇によって息子共々殺される。そしてこの異教の女神たちの血脈はマリアの中に流れている。玉座の聖母子像の起源は母なる女神イシスまで遡ることができるし、母親の子宮からではなく父親の頭部から誕生した女神アテネは、男たち(父なる神、英雄)による女(女神、母)の支配を奨励する女神であった。マリアは《無原罪の御宿り》で異教の敵である蛇と女神



図11 〈授乳するイシス〉27-30王朝、トリノ、エジプト美術館



図12 〈アテナ・バルテノス〉紀元前447-432年頃、ローマンコピー、高さ104cm、アテネ国立考古博物館

たちを踏みつける。それは彼女自身の源泉を踏みつける行為でもあったのだ。

女の性を否定するもの

父権的教会世界の中で女性的シンボルの象徴として君臨するマリアではあるが、彼女は果たして女性に与する存在であるのだろうか。マリアの根源に宿るのは原初の女神たちの記憶と血であることを多くの研究者たちが指摘してきたように、本来の彼女は人類が根源的に希求した大いなる母—グレート・マザー—の姿をしているのかもしれない。あるいは、それすらも彼女に後天的に付与された性質かもしれない。どちらにせよ、マリアという女性は、長い歴史の中で教会という社会によって都合の良いように捏造され、熱狂的な男性信者にあてがわれたばかりではなく、呪われた性をもつ女性信者たちへの現実的には到達しえない理想像として確立させられたのではないか。彼女は女の姿かたち—しかもその外見、内面は男性によって理想化されたもの—をしていようとも、その本質は男性にある。マリアは教会の象徴ともされるが、まさに彼女は聖母の衣装を被った男(教会)であるのかもしれない。その正体を隠しながら聖母は、「無垢なる母」すなわち最も信頼や親愛を獲得しうる人間偶像として祀り上げられ、信者からの崇拜を集め、「女は聖母のようにあれ」という規範をすべての女たち提供する。そこにあるのは絶対的なまでの父権的支配であり、教会の求める秩序の実現そのものではないか。女性支配のための装置的作用をマリアが担わされているのは確かだろう。

「処女マリアをイヴと同定し、彼女を性の放棄として定義される聖性のモデルとみなすことは、マリアの性格づけやクリスチャンの生活の定義だけでなく、教会のイヴの理解のしかたでも決定的な第一歩だった。(…)〈墮落〉の性的解釈が、マリアの処女性教義によって有効とされるようになった。楽園とはヴァージニティである。ヴァージニティの喪失が、恩寵からの転落である。マリアの独身は、彼女の勝利である。イヴの不服従は、したがって彼女の性的敗北である」³⁵。教会の教えの正当性と権威を高め

るには、何よりも神の救済のプランを明確化せねばならない。教会を通して人びとは神に祈り救いを得る。しかし救済の神話には墮落の神話が必須である。そうしてイヴは救済の神話の要として、必要悪として、「女性を差異化することに全力を傾注する父権社会のなかで生み出されたのである。救済の可能性をもっとも明確に示すには、まさしく墮落の根源であった女のなかから誰かを選ばなければならない。それが」³⁶第二のイヴであるマリアであり、教会が彼女に類例を見ない特権を付与した理由のひとつとなる。また、イヴは墮天使(サタン)という蛇によって誘惑され、神との約束を破り、神に不服従であったのに対し、マリアは受胎告知の天使(ガブリエル)と神に対して「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と信頼と喜びを示し服従する。教会が理想とし最良すべき女性像がどちらであるのかは明らかだ。

人類の母であるイヴを最底辺に追いやり、女にその性の放棄を勧めるマリア。しかし、処女でありながら母親であることを実現しうる女性などいない。教会において性を放棄した女性は修道女として生きることとなるが、それはごく一部の女性に限られた話である。己の性を完全に否定させる聖母信仰は女性尊重を意味するはずがない。「永遠の女性」の象徴として男たちによって作り上げられたマリアはいかなる女性の模範にもなりえない。「全女性の規範としてのマリアの献身を奨励してきたのは主として独身の聖職者であり、行き過ぎたマリア信仰は補償の心理的コンプレックスと関係がある。(…)マリアは形而上学的女性であって、現実におけるよりもはるかに面倒のない、理想的で、静止した女性である。彼女は『もうひとつの世界』に属しているので、男性と競争しない。彼女は飾り台の上に安全に追放されているので、自分自身の目的は何ももたずに彼の目的、彼の心理的欲求に奉仕する」³⁷。その欲求が処女性であり母性である。「永遠の女性」は女性の解放など望まずむしろ、「自己実現を求めている個々の女性にとっての敵」であるだけでなく「すべての女性にとって懲罰的な機能を果たす」³⁸のではないだろ

うか。

おわりに

「無原罪の御宿り」はマリアに特権的な処女性を与えた。それは誰もが勝ち取りえない地位であり、聖性であり、非人間性であった。何者よりも聖別されたものとして頂に輝き、悪魔や異端そして原初の女神たちをも踏みしめその地位や力を篡奪し支配者として君臨するマリア。《無原罪の御宿り》の中でマリアが踏みしめ蛇、そして蛇が巻き付く月は彼女の源泉ともなった太古の女神たちでもあった。蛇＝性欲の天敵としてのマリアは、性を賞賛する豊穡と多産の女神たちの敵対者ともいえるだろう。彼女は女の性を完全に否定する。人類の母であるイヴを地の底まで貶め、神の母の輝く玉座に鎮座する。《無原罪の御宿り》でマリアは蛇をふみつける。男による女の支配がいかんして為されてきたのかを、女と蛇の図像は古来より私たちに示してきた。父権的社会を目指した為政者たちは、古代の大いなる母神の地位を貶めるため、女神やその友であった蛇を父なる神や英雄によって足元に組み敷かせ支配させた。この伝統は《無原罪の御宿り》でも引き継がれたようだ。すなわち、マリアは父なる神(教会)となりイヴや異教の女神たちである蛇を踏み敷く。マリアは男としてイヴや女神たちの力や母たる地位を篡奪する。父権的支配の縮図がこの図像に見出すことができるのではないか。

また、この図像にはもう一つの隠された側面がある。それはマリアというひとりの女性の運命だ。聖母マリアは異教の女神や人類の母、女性を踏みつける「永遠の処女」として聖別された。しかしそれは支配者の偶像として求められた傀儡にすぎない。人間であり女性であった本来のマリアはそこには存在しない。「女の性に関わるすべて、子供の自然な生殖や出産を意味するすべては、彼女には許されなかった。彼女を身籠らせたのは聖霊であらねばならなかったし、そこに快樂があってはならなかった。彼女は息子を自然に生むことも許されなかった。なぜ

なら、彼女は出産においても無傷なままでいなくてはならなかったからである。後にはとうとう彼女は他の子供たちをもうけることも許されなかった。というのも、それは彼女の神性を傷つけることであり、恥辱を意味するからだ³⁹。篡奪者たるマリアこそ、より多くのものを篡奪された女性に他ならないのかもしれない。《無原罪の御宿り》で「蛇を踏み女」は教会の傀儡としての虚像たるマリアであり、「踏まれている蛇」は否定され排除されたゆえに本来の姿では表出されえない人間としての母であり女性であるマリア自身なのではないだろうか。ここでの蛇の図像は、マリアの「性」を証明するただ一つの象徴であるのかもしれない。

(注)

- 1 アウグスティヌス、金子晴勇訳『アウグスティヌス著作集第9巻』教文館、1979年。
- 2 ヤコブス・デ・ヴォラギネ、前田敬作他訳、『黄金伝説1』平凡社、2006年、532頁。
- 3 聖人、大修道院長、教会博士(1091-1153)。ヤコブスは『黄金伝説』の中で繰り返す彼の言説を典拠として取り上げている。
- 4 ヤコブス・デ・ヴォラギネ、前掲書、533頁。
- 5 「主の降誕後四十日目に聖母マリアは神殿に行き、潔めの式を受けられた(…)律法は、つぎのように定めている(…)受精によってみごもり、男の子を出産した婦人は、七日間不浄であり、そのあいだ人びととの交際を避け、神殿に立ち入ってもならない。七日たてば、人間にたいしては不浄はとかれる。しかし、なお、三十三日間は、神殿にいつてはならない。(…)聖母マリアは、この潔めの律法には該当されなかった。というのは、マリアは、受精によってみごもり出産されたのではなく、聖霊によってみごもり出産されたからである。」ヤコブス・デ・ヴォラギネ、前掲書、399-401頁。
- 6 ヤコブス・デ・ヴォラギネ、前掲書、410-411頁。
- 7 二世紀半ばに成立したとされる外典。副題「いと聖なる、神の母にして永遠の処女なるマリア誕生の物語」が示すように、マリアの誕生から受胎告知、イエスの誕生に至るまでの詳しい経緯を記す。
- 8 荒井献他訳『新約聖書外伝』講談社、1997年。
- 9 岡田温司『処女懐胎』中央公論新書、2007年、83頁。
- 10 『聖母マリアの御やどり』はエアドルメスが晩年の1125年頃に執筆したもので、教会の有力者によって廃止されて久しい聖母マリアの御やどりの祝日(12月8日)の再開をその執筆動機とする。
- 11 エアドルメス「聖母マリアの御やどりについて」矢内義顕訳、『中世思想原典集成10 修道院神学』、平凡社、1997年、75-76頁。
- 12 エアドルメス、前掲書、76頁。
- 13 エアドルメス、前掲書、84頁。
- 14 トマス・アクィナス、稲垣良典訳『神学大全Ⅻ』創文社、1998年、247頁。
- 15 トマス・アクィナス、前掲書、250頁。

- 16 R.R.リユースー、加納孝代訳『マリアー教会における女性像』新教出版社、1983年、109-110頁。
- 17 フランシスコ会系では「Redemptio Praeservativa(先取的救済)」、アンセルムス系では「Redemptio Anticipativa(先行的救済)」とも言われる。
- 18 西山俊彦「教皇不可謬権の事例的検証(1)－「聖母マリアの無原罪の御宿り」のケース(その二)－」、『英知大学キリスト教文化研究所紀要第21巻第1号』英知大学キリスト教文化研究所、2006年、45-46頁。
- 19 R.R.リユースー、前掲書、114頁。
- 20 R.R.リユースー、前掲書、104頁。
- 21 岡田温司、前掲書、92頁引用。
- 22 岡田温司(前掲書、106-107頁)によると、それぞれの銘文の出典はアウグスティヌスとその著『自然と恩寵』から、トマスが若い頃の著作『命題集』からということが判明しており、その他については、本人ではなく別の著者のものから引かれているとされる。
- 23 『雅歌』7.2「気高いおとめよ／サンダルをはいたあなたの足は美しい／ふっくらとしたももは／たくみの手に磨かれた彫り物」
- 24 エアドメルス、前掲書、90頁。
- 25 エアドメルス、前掲書、89-90頁。
- 26 聖書引用は『聖書新共同訳』日本聖書協会によるものとする。
- 27 マンフレート・ルルカー、林捷訳『シンボルとしての樹木』法政大学出版社、1994年、204頁。
- 28 R.R.リユースー、前掲書、122-123頁。
- 29 松原典子「対抗宗教改革期のスペインにおける説教と美術」、『上智大学外国語学部紀要39号』上智大学外国語学部、2005年、176頁。
- 30 ブルス・ベルナルド、池田敏雄訳『巨匠たちのマリア』中央出版者、1990年、222頁。ロベツ・レイの言葉。
- 31 集まった人々が応唱の形で捧げた中世の祈禱。『雅歌』の語句(ラテン語原典)がよく使用される。
- 32 宮下規久朗『バロック美術の成立』山川出版社、2003年、16頁。
- 33 ヤコブス・デ・ヴォラギネ、前掲書、411頁。
- 34 R&D.モリス、藤野邦夫訳『人間とヘビ』平凡社、2006年、55頁より「アテネの守護女神アテナは、楯のうえに都市の守護霊だったヘビをおいていた。ペルシア人が侵入してきたとき、彼女の聖域に飼われていたヘビは、いけにえのハネーケーキを食べようとしなかった。聖職者がこの不吉な知らせを伝えると、仰天したアテネの人たちは、守護神が自分たちを見かざったと考えて、アテナを見捨てそうになった」
- 35 J.A.フィリップス、小池和子訳『イヴ／その理念の歴史』勁草書房、1987年、212頁。
- 36 若桑みどり『象徴としての女性像—ジェンダー史から見た家父長制社会における女性表象』筑摩書房、2000年、191頁。
- 37 メアリー・デイリー、岩田澄江訳『教会と第二の性』未来社、1981年、125頁。
- 38 メアリー・デイリー、前掲書、111頁。
- 39 ウタ・ランケ - ハイネマン、高木昌史訳『カトリック教会と性の歴史』三交社、1996年、467頁。

山尾 彩香(やまお あやか)

西南学院大学博物館学芸調査員